

---

# 悪魔なコーチ

對悠狼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔なコーチ

### 【Nコード】

N2916G

### 【作者名】

對悠狼

### 【あらすじ】

聖魔学園中等部1年の詠月奨 ながつきしょう は、聖魔学園中等部野球部で、背番号16番を背負い、それなりの活躍を見せていた。しかしある日、奨は朝練に遅れてしまった。すると、コーチの鎖昏菟一 さくらそういち は、遅れてきた罰だと言って、奨の身体を欲しがり……！

## PROLOGUE (前書き)

三角関係、禁断の恋！  
今、解禁！

この小説は、BL小説です。  
この小説には、アダルトな言動が書かれています。  
ご注意ください下さい。

## PROLOGUE

「ピピピピピッ……ピピピピピッ……ピッ」

「……んんっ。なんだあ……？……ああ？7時40分……、  
ああっ！！」

寝過ぎたあゝ！朝練間に合わねー！」

そうして、慌ててベットから飛び降り、急いでジャージに着替えた。  
そして、急いで階段を駆け降りた。

「かあさん！なんで起こさないんだよっ！」

「なに言ってるのよ。何回起こしても起きなかったのはあんたでし  
ようが！人のせいにするんじゃない。」

「起きないなら、叩いてでも起こせよ！」

「バカ！あたしは、あんたも年頃だから遠慮したのよ。あんただっ  
て、見られたくないものもあるでしょ。」

「なっ……、ねえよそんなの……！とにかく送ってって、間に  
合わない！」

「はいはい。早く車乗りな！」

そうして俺は、母親の車で学校へ向かった。

それから数分後、俺が学校に着いたのは、7時48分。朝練開始時  
間から3分も後のことだった。

「やべ〜よ。鎖昏先生に怒られる。」

「ほら早くいきな。これ以上遅れたくないだろ。」

「ああ。じゃっ、行ってくる。」

「いつてらっしやい！」

そうして俺は、ほぼ全力疾走でグラウンドへ向かった。



**PROLOGUE (後書き)**

三角関係に禁断の恋！

波乱万丈な奨の恋が

今、はじまった！

続きどうぞ！

## 第1章：矛盾と決心（前書き）

部活に遅れた奨。

先生に見つかり、放課後の呼び出し。

そこで起こった出来事は・・・！

待望の第1章 ついに解禁！！

BLです。

アダルト系です。

## 第1章：矛盾と決心

「はあっはあっ……良かった……。まだ鎖昏先生来てない……」

「誰が来てないって？」

「え!?!」

俺は驚き、慌てて後ろへ振り返った。

「さっ、鎖昏先生っ!」

「何やってんだ、奨っ!朝練に遅れるとはどっいうことだ!」

「すっ、すいません!寝坊してしまっつて。」

「寝坊だあ?朝起きれなくなるまで起きて何してたんだ?」

「えっ!そっそれはその……」

「なんだ、言えないようなことでもしてたのか?」

「ええっつと、その……。誰にも言わないで下さいね……」

「ん?」

「実は昨日の夜……じ、自慰をしてました……」

「!じ、自慰だと!?!」

「はい……」

「……。そうか。もう、お前もそんなことするようになったのか……」

「……」

「すいません。」

「いや。まあいい。とりあえず放課後、俺のところに来い。話がある。」

「はい。」

「じゃあ、朝練しろ。」

「はいっ。」

それから俺は、朝練をして、いつもど通りの学園生活をおくった。

そして放課後・・・

「失礼します。」

俺は、鎖昏先生に言われた通り、鎖昏先生専用の部屋に来ていた。  
(この学園では、先生一人につき、一つの部屋が与えられている。  
なんでもついてます。)

「鎖昏先生、いますか？ 奨ですけど。」

返事は無かった。

「入りますよ。」

そう言っただ俺は、部屋の戸を閉めた。

「先生。いないんですか？」

その時、背後から鍵がかかる音がした。

「えっ!？」

驚いた俺が振り向く間もなく、背後から誰かに抱きつかれた。

「ちよっ! 鎖昏先生ですか? いきなり何・・・!」

俺の言葉はそこで終わった。

いや。正確には「奪われた」。俺の唇と共に、その人物の唇に。

「んんっ!・・・ん。」

いきなりの口付けに驚き、抵抗しようと足掻く俺の、見開かれた瞳に映った顔は、

紛れもなく、鎖昏先生のものだった。

流石に息苦しくなった俺は、鎖昏先生の肩を押し返し、無理やり引き剥がした。

「はあっ、はあっ・・・。なんで・・・こんなこといきなり・・・。」

俺がそう聞くと、鎖昏先生は、口端から漏れた、俺と先生の唾液を舌で舐め取りこう言った。

「なんで、か。そっだな、強いて言えば、朝練に遅れてきた罰だな。」

「え? 罰・・・?」

聞き返した俺を見て、先生は微笑した。

「そうだ。それに俺は、お前の身体が欲しい。それに、お前だって自慰をするくらい」

欲求不満だったんだろ。だから、丁度良いと思つてな。」

「えっ！別に俺はそんな・・・！」

「どうだかな？だったら、誰を思つて自慰をした？お前にだって、恋人の一人ぐらい居るだろ？」

「それは・・・。じゃあ教えますよ。相良翔瀏 さがらかけるで  
す。同じクラスの・・・。」

「相良翔瀏・・・！男か？」

「はい。」

「・・・そうか。お前もホモだったのか。」

「・・・はい。」

「それで、そいつを思いながらヤツたのか。」

「そうです・・・。」

「なんで抱いてもらわないんだ？」

「だって・・・、抱いてくれなんて、恥ずかしくて言えないじゃないですか！」

「・・・そうだったのか。だったら話が早い。大人しく俺に抱かれろ！」

「はあ？何言つてんですか？なんでそんな・・・。」

「なんでつてそりゃあ、俺はお前が欲しい、お前は欲求不満。こんな二人がいたら、することは一つだろ。」

「そんな・・・、無理やり過ぎじゃ・・・！」

すると鎖昏先生は、また俺の言葉を遮つてキスしてきた。

「んんっ！やあっ・・・だめっ・・・んんっ。」

最初は抵抗を見せていた俺も、鎖昏先生のうま過ぎるキスに、思わず甘い声を出してしまった。

「んんあ・・・、さく・・・ら、せ・・・んせっ・・・。はあっ・・・。」

「ふっ、可愛いな奨。このままヤツてもいいか？」

「え？・・・は・・・い。」

「えっ！」

「・・・俺を、抱いて下さいー!!」

俺は、もうどうにでもなれ!といった感じでそう言い、鎖昏先生に抱きついた。

「・・・、まったく。やめろと言ったり、抱けと言ったり、優柔不断というか、矛盾してるといっつか。はぁ・・・。」

鎖昏先生は、わざとらしく大きなため息をついてから、勢いよく俺を抱き上げた。そして小声で、こつ言った・・・。

「・・・後悔すんなよ、奨。」

「・・・しませんよ。」

そうして、俺は鎖昏先生の腕に抱えられながら、備え付けの寝室へと向かった・・・





## 第1章：矛盾と決心（後書き）

いかがでしたか？  
続きもお楽しみに。

## 第2章・絶頂（前書き）

B Lです。

アダルトです。

Hシーンです。

## 第2章：絶頂

「・・・はあっ、んくっ・・・。やあ・・・んん。」

俺は今、鎖昏先生のベッドの上にいる。

あの後、しばらく熱い口づけながら、互いの衣服を脱がせ合った。そして、互いが全ての服を脱がせ終え、すべてが露わになった時、それまで合わせていた

唇を離し、一度見つめあって、ベッドに身をうずめた。

そして今、俺は既に一度熱を解放した自分のモノを握り、ほとんど二つ折りの状態で

鎖昏先生に後ろを攻められていた。

「気持ちいか？奨。」

「・・・はんっ・・・き・・・もち・・・んんっ。」

俺は既に、一度気をやったことで、自分がどれほど恥ずかしい格好をしていようと、

気にはならず、素直に声をあげ感じていた。

「かわいいな、奨。」

「やつ・・・だ・・・。可愛い・・・って、言わない・・・でくだ

さい・・・鎖昏・・・せん・・・せ・・・。」

「鎖昏先生じゃなくて、蒐一って呼んでくれないか、奨。」

「・・・そう・・・い、ち・・・。」

「いい子だ、奨。」

「・・・やあん。だっ・・・め・・・。はやい・・・。」

蒐一は、俺の後ろに入れていた指の動きを、さらに速めた。

「気持ちいだろ、奨。」

「う・・・ん。」

「もつと硬くて熱いモノで、掻き回されたくないか？」

「えっ・・・っ!」

そう言った直後、蒐一は指を引き抜き、代わりに自らの熱く滾った

モノを差し入れた。

「ひんっ・・・あんっ・・・。だ・・・めえ。い・・・たい。」

「大丈夫、ゆっくり優しくしてやるから。少しだけ我慢しろ。痛いのは最初だけだ。」

先端のヒダを過ぎれば、あとは滑るように入って行くから、安心しろ。」

「でっ・・・も・・・。」

「俺を信じろ、奨。」

そう言うと蒐一は、そっと身体を倒し、俺の耳元で小さく囁いた。

「すぐに気持ち良くしてやる。・・・愛してる、奨。」

「え?・・・っあ!」

言い終わると同時に、自分のモノを勢いよく押し込んだ。

「やああっ!」

「・・・くっ。」

「ズブッ・・・」

「ああんっ・・・。」

先端のヒダが入った衝撃で、俺は再びの熱を解き放った。

「はあはあ・・・。」

「大丈夫か、奨。」

「うん・・・。」

俺がそう答えると、蒐一は小さくフツと笑い、途中まで入っていたモノを、一気に差し入れ

激しく動かした。

「やあっ・・・はや・・・い。もっと・・・ゆっくり・・・。」

「ん?だめだ、もう我慢できないからな。」

「そんなあ・・・ひど・・・い。」

「・・・いやか?」

そう聞かれた俺は、なんとも言えない罪悪感に襲われた気がした。

「・・・いや・・・じゃない。」

「そうか、よかった・・・。」

俺が答えると、菟一は、心の底から嬉しそうな顔をした。

(ドキッ……!)

俺は、その時の菟一の顔を見て、なぜかドキッとしてしまい、無意識に菟一の顔を抱きよせ、

そつと囁いていた。

「……入れて、菟一。……中で、出して。」

「!……ほんとに、いいんだな？」

「……うん。」

俺がそう答えると、菟一は、一つ口づけると、再び動き出した。

「うん……ああっ。す……じい。……もっと……。」

「はあっはあっ……。」

俺と菟一は、少しずつ、絶頂へ向けて昇まっていった。

そして……「ドクンッ……」「ビュルッ……」

「ああああ……!」

「んくっ……!」

俺たちは……

絶頂を迎えた……。

## 第2章：絶頂（後書き）

いかがでしたか？  
次話もお楽しみに！

### 第3章：禁断（前書き）

蒐一とヤツてしまった奨。

目が覚めた2人は・・・！

第3章 解禁！

BLです。

アダルトです。

### 第3章：禁断

「……んん？……ここ……は？……んんっ！」

起き上がるうとすると、下半身に鈍い痛みを覚えた。

何かと思い、目をやると、そこには、自分の後ろが、太いモノで貫かれてるのが目にとまった。

（ああ、そうか俺たち……）

そう思い横を見ると、そこには、静かに寝息をついている、蒐一の姿があった。

「やったんだよ……な……。」

「後悔してるのか？奨。」

「！起きてたのか？」

「ああ……で、後悔してるのか？」

「……してねえよ、するわけ……ねえーだろ！」

そう言った俺は、そのまま蒐一に軽いキスをした。

「むしろ……して良かった。」

「……奨。……ああ、俺もお前とできてよかったよ、奨。

楽しかった。」

「うん。俺も、気持ち良かった。」

そう言った後、俺たちは、互いにキスを求め、最初は触れるだけのキスも、回数を重ねながら、より深く、より甘いものへとかわっていった。

「んっ、はあ……。ねえ、蒐一……。」

「んん？なんだ？」

「もしよかったら、……もう一回、してくれない？」

「！……何言ってた。」

「え？」

「もう一回どころか、毎日だってやりたいぞ、俺は……。」

「！ほんと？」

「ああ、ほんとだ。」

「よかった。」

俺が笑うと、蒐一は、俺の顎をつかんで自分のほうに向かせ、そのままそっと押し倒し、

自分の唇を俺のそれに重ねた。

俺は抵抗することもなく、彼の舌を受け入れた。

そうして俺たちは・・・

禁断の愛を交わした・・・。

### 第3章：禁断（後書き）

いかがでしたか？  
またどうぞ。

**第4章：嫌な奴・・・（前書き）**

蒐一と愛を交わし、家に帰った奨。

風呂で見た自分の身体には・・・！

第4章 解禁！

BLです。

アダルトです。

#### 第4章：嫌な奴・・・

「ただいま。」

「おかえり、奨。今日は少し遅かったわね。」

「えっ・・・あ、うん、ちよつと長くなつてさ。」

「そつ、ご飯できてるけど、先にお風呂入る？」

「ああ、うんそうする。」

そう言つて俺は、階段を駆け上がり、風呂の準備をして、浴室へ向かった。

「チャプンツ・・・」

「・・・ふう。なんか、いつもより、疲れたなあ・・・。」

俺ん家の風呂は、自慢じゃないけど、それなりに広い。

お湯の温度は、決まって45度。(じゃないと、男どもが拗ねるから・・・)

ゆっくり鼻のあたりまで浸かつて、ふと、俺は気付いた。

自分の身体のいたるところに、無数の赤い斑点がついていることに。

「ん？なんだこれ・・・、あつ！」

その時、俺の頭には、SEXをしているとき、時折蒐一が、俺の身体のおちこちに、軽く吸いついては離しを、何度も繰り返していたから、不思議で何をしているのか聞いてみたら、短く一つ、「キスマク！」と言っていた、蒐一の顔が浮かんでいた。

「・・・くつつつそ〜。蒐一の野郎〜！こんなにつけやがつてえ〜！覚えてろよ〜！」

そう言つて俺は、頭まで、勢いよく湯船に突っ込んだ。

しばらくして、風呂からあがった俺は、ささつと飯を食つて、急いで自室へ向かった。

「糞野郎〜！ケツにまでつけやがった・・・。」

そう言いながら俺は、黙々と宿題をやっていた。

しばらくして、宿題の終わった俺は、ベッドに横たわって、自分のモノを握っていた。

「・・・んっ。あふっ・・・、んんっ・・・あっ！」

「ビュクッ」

「はぁはぁ・・・。きもちっ・・・。」

俺は、起き上がり、今出たばかりの僅かに白濁した自分の体液を見て、少し驚いた。

「うわっ！すごい量！」

手のひらいっぱい精液を、丁寧に拭き取り、自分のモノも拭いてから、改めてベッドに入った。

「はぁ、やっぱり疲れたな。今日は早く寝よ。」  
目を瞑ると、俺は、すぐに眠りについた。

俺のその日の夢は・・・

まあ、言うまでもないと思うからいいかな・・・。

第4章：嫌な奴・・・（後書き）

どうでしたか？

またどうぞ！

## 第5章：危機（前書き）

前日のことを、気にしていた奨。

帰りに、恋人の翔瀏に呼び出されてしまった。

この後が気になる第5章 解禁！

BLです。

アダルトです。

## 第5章：危機

「・・・はあ。」

「・・・う、・・・う。・・・奨つ！」

「おつ！なつなんだよ？」

「なんだよじゃないだろ！さっきから呼んでるのに、お前ぼーっとしてるんだもん。」

「えっ？ああ、ごめん、何？」

「何じゃないよ。どうしたんだよ？さっきからずっとため息ばっかついて。何かあったのか？」

「えっ、ああうん、まあちよつとな・・・。」

「？・・・ちよつとってなんだよ？言ってみるよ、聞いてやるから。」

「いや、いいんだ。お前には、関係ないことだしな。」

「関係ないないだろ。」

「なんで？」

「なんでって、ダチだろ、俺たち。」

「ダチ・・・。」

「そうだよ、ダチだよ！なっ！」

「・・・ああ、そうだったな・・・。」

今俺が話してるのは、隣の席の女、神海昇 こうみまい だ。

こいつは女だが、自分のことを 俺 と言ったり、異常なほどに男と仲が良かったり、

態度や言葉遣いが男っぽかったり、とにかく、全体的に男っぽい！だから俺は、こいつのことは、女子ではなく、女と言ったんだ。

どんな感じが違うのか解らないけど、ともかく、こいつは女だ！で、いつも、俺のことを気にかけてくれたり、色々とやってくれたりする。

一言でいえば、『いいやつ』だ。

「なあ、奨。話してみろよ。」

「・・・じゃあ、秘密だぞ。」

「おうっ！」

そして俺は、蒐一との出来事を、全て包み隠さず話した。すると、昇は・・・。

「・・・ふうん。それで？」

「そっ、それでって・・・それだけ？」

「だって別にいいじゃんか、悪いことしてるわけでもないし。」

「そりゃそうだけど、気持ち悪いだろ。」

「別に。だって、過ぎたことはもう、どうにもできないだろ？それに、好きって気持ちはどうしようもないんだから、仕方ないんじゃないか？」

「でも俺、付き合ってるのに・・・。」

「それはそれじゃん！」

「・・・はあ。もういいよ、わかった、ありがと。」

こいつはこういうやつだから、なにを言っても無駄だった。それでも俺は、なんだか気が楽になった気がした。

そんなこんなでこの日は、少し軽い気分で授業を受けた。

そして、放課後。

部活に行こうとした俺を引き止める声があった。

「奨っ！」

「ん？あっ、翔瀏。」

「ちょっとさ、話あんだけど、いい？」

「えっ！ああ、うん……。」

そして俺たちは、少し気まずい空気で、

校内にある、シアタールーム（映画やビデオを見るところ）へ  
向かった……。

## 第5章・危機（後書き）

この後が、  
大変！！

第6章・そばについて・・・（前書き）

翔瀏と共に、シアタールームへ来た奨。

そこで明かされる真実・・・!?

そして、揺れ動く互いへの想い・・・。

第6章 ついに解禁!

BLです。

アダルトです。

第6章：そばについて・・・

「・・・！いつ、いまなんて・・・？」

「抱かせるって、言ったんだ。」

「なんで急に、そんな・・・。」

「別に急でもないだろ。付き合い始めてもう6カ月。どっちかっていうと、少し遅いくらいだろ。」

「でも・・・。ほんとにいいのかよ？俺なんかで・・・。」

俺がそう言つと、翔瀏は振り返り、俺のほうへ近づいてきた。

「なにいつてんだよ。・・・お前じゃなきゃ・・・だめなんだ・・・。」

「  
そう言つた翔瀏は、そつと俺を抱きよせ・・・キスをした。」

「・・・ん、やん・・・。」

「ちゆく・・・ぴちゃ・・・。」

「あ・・・か・・・けるう...んん」

俺が名前を呼ぶと、翔瀏は唇を離し、俺の顔を覗き込んだ。

「なに？」

「あ、あのさ・・・立つてられない・・・。」

「・・・うん。」

軽く頷いた翔瀏は、俺を、横にある椅子に座らせた。

俺たちがいるのは、最前列だったから、俺が座つた前の床に、翔瀏は膝をついた。

「これで大丈夫？」

「うん、ありがとう。」

「・・・ねえ奨。」

「ん？なに？」

「・・・フェラ、していい？」

「えっ!?!?・・・あ、うん・・・。」

「ありがとう・・・。」

そう言った翔瀏は、そつと俺のジャージの中に手を入れ、既に硬く起ち切っている俺のモノをそつと取り出した。

「・・・！俺のキスで、感じてくれたんだ・・・うれしい。」

そう言って笑った翔瀏は、俺のモノに口を近付け、ゆっくりと舌を這わせた。

「・・・つ、ああっ！・・・んん、か・・・けるう・・・。」

「奨、気持ちいい？」

「あんっ、うん。・・・き・・・もち・・・。」

俺がそう答えると、翔瀏は嬉しそうな笑みを浮かべ、いままで舐めていた俺のモノを、そつと口に含んだ。

「あっ！やつ・・・だっ、め・・・。」

「じゅぷっ、じゅぱっ・・・。」

「んんっ・・・やあ・・・。イ、イクう・・・。」

「いいよ、イって。・・・飲み干してあげる！」

そう言うと同時に、翔瀏は、俺のモノを強く吸い上げ、上下に入れたり抜いたりを繰り返した。

「やあんっ！・・・だめえっ、は・・・やいっ・・・！」

翔瀏が最後に強く吸い上げると、俺は呆気なく精を吐き出した。

「・・・んうっ！・・・はあ。」

「んっ・・・ゴクンッ・・・。」

なんと翔瀏は、有言実行！とばかりに、俺の吐き出した精液を、喉を鳴らして飲み込んだ。

「・・・！ほっ、ほんとに飲んだのかっ！？」

「なに？」

「だって・・・き、汚い・・・。」

「汚くないよ。だって、奨のだし。甘くて旨いよ。」

「なっ・・・！んなわけねえだろ。」

そう言って赤くなる俺を見て、薄く笑った翔瀏は、そつと俺を抱き

よせた。

「好きだよ、奨。」

その言葉を聞いた瞬間、俺の心に、黒く重い塊が落ちた。  
その塊の名は

### 罪悪感

俺は唐突に悲しくなって、思わず涙を流してしまった。

「！どつ、どうした奨？どつか痛いか？・・・俺のこと・・・嫌いか？」

「ちがつ・・・う。そうじゃな・・・くて。お、れ・・・ごめっ・・・」

「・・・？」

「俺、寝ちゃったんだ・・・。」

「俺、蒐一・・・鎖昏先生と、寝ちゃったんだ・・・。」

「・・・なっ！うそだよな・・・？」

「ほんと・・・。ごめん、翔瀏・・・。」

俺が謝ると、翔瀏は俯き、黙ってしまった。

「翔瀏・・・ん！」

翔瀏の様子を訝り、顔を覗き込んだ俺の顎を掴み、翔瀏は強引にキスをした。

「んんっ・・・あふっ、んくっ・・・やあっ！」

驚いた俺は、抵抗しようとしたが、伸ばしたその手を掴まれ、逆に椅子に押さえつけられ、身動きが出来なくなった。

「んんうっ！」

ぴったりと合わさっている唇では、鼻だけの呼吸では間に合わなくなっ、

俺は呼吸が苦しくなった。

「・・・んんっ・・・。」

いよいよ本格的に苦しくなり、意識が途切れそうになった時、きつく結ばれていた唇が

いきなり離された。

「んんっ……はっ！かはっ……はあはあはあっ……！」

急激に入り込んできた空気に咽せ、すこし荒い呼吸を繰り返す俺の前で、翔瀏は、

ただ立ち尽くし 泣いていた ……。

「……、か……ける？」

「………。」

それを見た俺は、立ち上がり、翔瀏の身体を抱きよせ、そのままそつと椅子へ座らせた。

「ごめんな翔瀏。俺たち、付き合ってるのに、こんなんじゃ……だめだよな。」

「………。」

「………別れよう。」

「っ！嫌だっ！」

「えっ！」

「別れるのは……嫌だ。奨と一緒にいたい……。」

驚いた。こんなに酷い事をしたのに、それでも翔瀏は、俺と一緒にいたいと言ってくれた。

俺は、さっきより強く、それでいて優しく、翔瀏のいつもより小さく見える身体を、そつと抱き寄せ、キスをした。

「ありがとう。でも俺は、これ以上お前を……傷つけたくない。だから……。」

「傷ついてもいい！何されてもいいから！……そばにいて……奨。」

その瞬間俺は 泣いた

「……あり……が……とっ……うっ……。」

泣きじゃくる俺を、翔瀏は、そつと椅子へと導いた……。

俺たちは薄暗いシアタールームの

闇へと沈んだ

第6章・そばについて・・・(後書き)

どうでしたか？

次回は・・・

！？

## 第7章・求性（前書き）

互いの想いを確かめ合った2人。  
そして・・・。

第7章 ここに解禁！

BLです。

アダルトです。

## 第7章・求性

「ちゅく・・・ちゅく・・・」

「んっ、はあっ・・・きも・・・ちい・・・。」

「んっ・・・んっ・・・」

今俺は・・・翔瀏のモノを銜えている。

あの後翔瀏は、自らの熱く滾ったモノを出し、椅子の背凭れを掴み、俺の上に覆いかぶさるような体制になった。

俺は、翔瀏のソレを躊躇することなく口に含んで扱いた。

俺が翔瀏のモノを扱っていると、翔瀏は俺のモノを掴み、扱きだした。

「んっ・・・やんっ・・・そっ、そこお・・・いい・・・イクっ・・・

・しょうおっ！」

「んんっ！・・・ああっ・・・！」

翔瀏は、俺の口と顔に自分の精液を吐き出した。

それと同時に俺も、翔瀏の手を濡らした。

「んはっ・・・、翔瀏の・・・熱い・・・！」

「ごめん・・・はあ・・・、我慢・・・できなくて・・・。」

「んっ、でも・・・いいよ・・・旨いしな。」

そう言いながら俺は、顔に付いた精液を手で拭いながら舐め取った。

「ん、奨のもやっぱ旨いよ・・・。」

そう言いながら翔瀏は、手に付いた俺の精液を舐めた。

「・・・ねえ、翔瀏。」

「んん？なに、奨。」

「まだ・・・終わらないよな・・・。」

「・・・。何言ってるんだよ・・・終わらせねえよ！」

「んっ、あふっ・・・。」

「なあ、奨。入れたいんだけど、いい？」

「・・・当たり前だろ！俺だって・・・お前が欲しい。」

そう言った俺は、そっと目を閉じた。

そうして俺たちは

さらに 奥を求めた



## 第7章・求性（後書き）

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに！

**第8章：残り香と揺心（前書き）**

更に互いの奥を求めた2人は・・・。

第8章解禁！

BLです。

アダルトです。

## 第8章：残り香と揺心

「……うくつ！だっ……め……、痛いイ……！」

「大丈夫。ゆっくりやるから。」

俺は今、翔瀏の指で、後ろを弄られている。

濡らさないままで指を入れたから、俺は痛くて堪らず、声をあげてしまった。

泣き眼になる俺をよそに、翔瀏は俺の敏感なところを探しながら、更に奥へと指を進めた。

「ああ……だめ……。濡らしてないのに……。」

「……わかったよ。じゃあ濡らしてあげるから。」

そう言うと翔瀏は、一気に指を引き抜いた。

「あつ！つ……。」「

「すぐ良くなる……。」「

そう、耳元で囁いた翔瀏は、いきなり俺の腰を高く持ち上げた。

「っ！なに!?!」

驚いている俺をよそに、翔瀏は、後ろへ顔を近づけ……舐めた。

「！やつ……。汚いつて、やめろ……。」

「いいから、黙ってる。」

そう言うと翔瀏は、再び後ろに舌を這わせた。

「ぴちやつ……。ぴちゅっ……。」

「やんっ……。だめ……。」

汚いと思いつながら、俺は、翔瀏の巧みな舌使いに感じて、甘い声を出してしまっていた。

「ぴちやつ……。つぷっ……。」

「あつ！」

翔瀏はいきなり、ほぐれてきた後ろに、舌を差し入れてきた。

「だっ……。だめ、それ……。いやぁ……。！」

嫌がり暴れる俺をもとせせず、翔瀏はより深く、舌を進めてきた。

「くう……んあつ……もう。」

俺は、いつまでも焦らしている翔瀏の行為に我慢できなくなり、翔瀏の頭を掴み、顔を上げさせた。

「もう……いいから。……はやく……いれるよ……。」

「でも、痛い嫌だろ？」

「ん、大丈夫だから。はやく……お前を感じたいから。」

「可愛い事言うじゃん……。」

翔瀏は、軽く笑って、身体を倒した。

「気持ち良くしてやるよ、奨。……愛してる。」

そう囁いた翔瀏は、俺の後ろに自分のモノをあてがい、ゆっくり差し込んできた。

「あうんっ!!」

「んっ……。」

「ズプンッ……。」

「やああっ……!!」

「くうっ……!!」

「ドクッ……」「ビュクッ……」

「はあはあっ……。」

「はあはあっ……。大丈夫か？」

「うん……。」

翔瀏は俺の上に倒れこんだ。

俺たちは、共に荒い息を継いだ。

しばらくそうして抱きあってから、ゆっくりと身体を離れた。

「……んんっ!!」

「くうっ……。」

「ズルンッ……」

翔瀏のが抜けた瞬間、熱い液体が後ろから溢れたのがわかった。

「んんっ……。あっ……。ついい。」

「かわいいよ、奨。」

「いいから……。そごいで。」

「はいはい。」

翔瀏をどかせて、ゆっくり立ち上がった俺は、片づけをはじめた。

「ねえ奨。お前、部活行っていいぞ。俺片づけとくから。」

「え、いいのか？」

「ああ。どうせうちの部、走るだけだし。」

「じゃあ、後頼んだわ。」

「ああ。またな。」

「おう。」

そうして出口に向かう奨の背中に、翔瀏は声をかけた。

「奨。」

「ん？」

「俺・・・好きだから、お前のこと。何があっても、愛してるから。」

「・・・ああ。」

奨は、それだけ言うと、出て行った。

「・・・本気だからな。」

俺は気持ちを切り変えて、自分たちの飛ばした精液を拭く作業にはいった。

そんな少年たちの、揺らぐ気持ちを知らぬのは

微かな残り香の漂う 薄暗い部屋だけだった

第8章・残り香と揺心（後書き）

どうですか。

まだどうぞ。

第9章：優しさ・・・（前書き）

；  
・・・超久しぶりの投稿です。（このユーザー名使えなくなってた；

短めですかね・・・？w

BLです。

## 第9章：優しさ・・・

「・・・ふう。なんか俺って・・・優柔不断じゃねえ？」

二股かけてるし、本命どつちかわかんねえし・・・ん？だから二股なのか？

「・・・つて、もうわけわかんねえっ！」

「何がわけわかんねえんだ？」

「えっ！そうっ・・・鎖昏先生っ！」

「よう、どこ行ってたんだ、奨。お前来ないと、ノックがつまんねえじゃねえか。」

「えっ、あつすいません！ちょっと、いろいろあつて・・・。」

「ん？いろいろつてなんだ？」

「えっ・・・あつ、そのっ・・・それは、えつと・・・。」

「まさか、他の奴とやってたんじゃねえだろうなあ？んん？」

「・・・っ！・・・。」

「ほんとなのかよ・・・？」

「・・・ごめんなさい・・・。」

「・・・はあ、謝らなくていいよ。どうせ翔瀏だろ？」

「・・・うん。」

「それならいいよ。彼氏なんだしな。」

「！おこんねえの？」

「怒るわけねえだろ。・・・好きな奴、怒れるかよ。」

「チユツ・・・。」

「んっ・・・。ありがとな。」

「ほら、行くぞ！」

「ああっ！」

俺は菟一のその優しさに罪悪感を覚えながらも、

彼に心配をかけないように笑顔を作つて、菟一の手をつかんで立ち上がった。

そうして俺たちは、グランドへ足を向けた。

第9章：優しさ・・・（後書き）

どうでしたか？

短い上に内容がないでしょ・・・。

すみませんw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2916g/>

---

悪魔なコーチ

2010年10月22日00時20分発行